

表3-1-2(1) 参考文献リスト

No.	タイトル インデックス	文献タイトル	掲載誌名	発表形態の区分		発行年	頁	発表者 インデックス	発表者	カテゴリ	キーワード(最大5語)	要旨(能代断層調査関連)
				学会機関誌・団体研究発表・大学研究・公的機関・図書								
1	1694	1694(元禄7年)能代の地震	歴史地震			1985	191-194	あわた	栗田泰夫	古地震	1694年地震, 地殻変動, 隆起, 推定震源域, 能代街上新層群	1694年能代の地震は, 能代街上新層群の活動によるものである。八郎潟北東部は長さ7km, 最大幅650mの湖底が隆起した。断層の(垂直)変位量は1.6mと計算できる。
2	Quat	Quaternary tectonics and damaging earthquakes in northeast Honshu, Japan	Earthq. Predict. Res.3	Earthq. Predict.		1985	231-251	あわた	Awata Y and Kakimi T	テクトニクス	第四紀, テクトニクス, 被害地震, 能代街上新層, 活動予測	東北日本における活断層の分布。特に日本海沿岸におけるM7.0以上の震源分布から空白域の存在を示し, 近い将来の地震の発生を予測している。
3	とうほく	東北日本弧中部内帯の短縮変動と太平洋プレートの運動	月間地球, vol.10, No.9	科学専門誌(海洋出版)		1999	586-591	あわた	栗田泰夫	テクトニクス	東北日本弧, 短縮変動, プレートテクトニクス	以降の垂直変位速度は1.0m/ka, 活動開始時期は3.4Maと求まる。潟西層による100ka以降の水量変位速度は0.4m/ka以上と求まる。
4	こじしん	古地震学—活断層の活動様式と地震の発生様式	深田地質研究所ライブラリー-20	(財)深田地質研究所		1996	28-35	あわた	栗田泰夫	古地震	地震記録, 断層変位, 断層破壊モデル, 多重セグメント	秋田-山形の内陸で17~20世紀に起きたM7前後の地震は30km2位の震源域をもち, 時にはそれが複数でつながって大きな地震になるのではないかと。
5	しんべん	新編 日本被害地震総覧[増補改訂版416-1995]	新編 日本被害地震総覧[増補改訂版416-1996]	東京大学出版会		1996	55-56, 62-63, 99-100, (全493)	うさみ	宇佐美龍夫	地震災害 古地震	被害地震, 古文書解析, 1964古地震	「出羽国秋田領高郡合併部分色目録」によると, 八郎潟の北岸能代街上新層と森岳断層の間, 長さ約7km, 最大幅600mの地隆起新田となる。ほか, 建築物被害多数掲載。
6	のしろ	能代地域の地質	地域地質研究報告	地質調査所		1984	全91	おおさわ	大沢 穰 ほか	地質構造	1/50,000能代地域, 地質構造, 断層, 層序, 能代街上新層群	能代街上新層群の活動史。坑井資料による垂直変位量から, 鮮新世末期に活動を始め, それ以降ほぼ一様な変位速度(0.6-0.7m/1000年)で変異を累積させた。
7	もりたけ	森岳地域の地質	地域地質研究報告	地質調査所		1985	全69	おおさわ	大沢 穰 ほか	地質構造	1/50,001森岳地域, 地質構造, 断層, 層序, 能代街上新層群	能代街上新層群は, 八森町中浜から八電町洪口までのおよそ30km以上の延長が確認されている。3-5条のN-S断層からなり, 断層帯の幅は2-5kmである。
8	とうほく	東北地方で発見した段丘堆積物をきる断層露頭	活断層研究, vol.6	活断層研究会		1989	9-17	おおた	太田陽子 ほか	活断層	能代東方鶴形, 正断層, 露頭, 崩壊地形	能代市東方鶴形の切削で砂礫層を切るたくさんの正断層が見える。付近の地形から段丘外縁部の崩壊地形の形成と関係している。
9	わがくに	わが国における高レベル放射性廃棄物地層処分技術的信頼性-地層処分研究開発第2次とりまとめ一分冊1わが国の地質環境	同左	核燃料サイクル開発機構		1999	112-115 (全437)	かつだん	活断層研究会	活断層	鮮新-更新世盆地, 平野の沈降速度, 変動プロセス	能代平野の第四紀の沈降量は, 2.5Ma以降1,000m以上, また1.5Maの層は163mに位置する。
10	おがはん	男鹿半島東部潟西地域における潟西層	地球科学, vol.37 No.2	地学団体研究会		1983	69-80	かたにし	潟西層団体研究グループ	更新統層序	潟西層, 男鹿半島, 段丘面, 花粉分析, 下末吉面	潟西層が分布する潟西面は標高40-60mを示し, 温暖な気候下における高海面期に沿岸性堆積環境下で形成された。このような特性から潟西層は「下末吉層」に対比される。
11	しんべん	新編 日本の活断層-分布図と資料-	同左	活断層研究会		1991	112-115 (全437)	かつだん	活断層研究会	活断層	上断層, 小手萩断層, 盤断層, 高野野断層, 逆川断層	能代断層は, 長さ11km, 走向NSであるとされる。能代市周辺には, 能代市北側に荒野の・小手萩・盤の各断層が, 南側には逆川断層がある。
12	はちろう	八郎潟干拓地における活構造探査	東北地域災害科学研究	文部省, 自然災害特別研究, 災害科学総合研究班, 東北地区部会		1999	23-32	きつわざき	野崎長 ほか	地質構造	反射法地震探査, 資料収集, 八郎潟	八郎潟干拓地南端部でのP波浅層反射法では, 500m以深の地層を大きく変位させる断層が, S波では40~100mの深度で1~数mの段差が更新統から完新統にかけてみられた。
13	ふくざい	伏在断層の地震危険度調査手法について	応用地質vol.40 No.2	日本応用地質学会誌		1999	60-69	こまつばら	小松原 琢	活断層調査	活褶曲, 伏在断層, 地震危険度調査	伏在する逆断層の活動では複背斜構造が作り出される。活動時期と変位量を明らかにするには活褶曲を横切る新規堆積物の構造や段丘面の高度のほか, 地殻変動を示す他の指標を用いる。
14	げんこう	現行の活断層調査手法の問題に関する私見	月間地球, 号外	科学専門誌(海洋出版)		2000	30-37	こまつばら	小松原 琢	活断層調査	活断層の全体像, 活動履歴復元	能代市北側の東雲地区を含む断面では, 能代断層の上盤では中位段丘が幅数kmに達する換曲構造で狭く50m上下変位しているが, 空中写真判読では幅約1km, 上下変位量は約40m。
15	あきた-お	秋田県男鹿半島で発見された始良Tn火山灰	第四紀研究, vol.27, No.3	日本第四紀学会誌		1988	187-190	しろいし	白石建雄 ほか	テフラ	始良Tn火山灰(AT), 最終間氷期後半, 箱井層	五里合西方で潟西層を不整合で覆う堆積物があり, 箱井層と呼ぶ。その底面のテフラはATと同定した。花粉組成は寒冷な気候を示し, 最終間氷期極相期頃の炭素年代である。
16	あきた-は	秋田県八郎潟の完新世地史	地質学論集, No.3	日本地質学会		1990	47-69	しろいし	白石建雄	地史 層序	八郎潟, 砂丘, 腐植土層, 海水準微変動	砂丘から, 縄文海進から小海退への海面低下期(6,000~4,800y.B.P.)後, 期縄文海進から弥生の小海退(3,000~2,000y.B.P.)への海面低下が示唆される。沈降帯である八郎潟の地下には-30~40mに潟西相当の堆積物が, -65mに基底の不整合面がある。
17	あきた-お	秋田県男鹿半島における西日本起原の漂流軽石・降下火山灰の発見とその意義	第四紀研究, vol.31, No.1	日本第四紀学会誌		1992	21-27	しろいし	白石建雄	テフラ	上部更新統, 潟西層, 漂流軽石, 広域火山灰, 男鹿半島	男鹿半島安田でAso-4とSK漂流軽石が見出され, 潟西層はToyaからSK降下まで堆積し小原台期に対比される。安田地区では沈降が大きく潟西層の離水後も水中堆積が継続している。潟西層を覆うこの堆積物はAso-4を挟む。
18	あきたけん	秋田県男鹿半島における上部更新統層序の再検討	第四紀研究, vol.38, No.1	日本第四紀学会誌		1999	29-39	しろいし	白石建雄・竹内貞子	層序	田砂岩部層, 花粉分析, 広域テフラ, 男鹿半島	安田海岸大露頭は, 安田層と, 潟西層に区分されていたが, この安田層は模範地である潟西層の一部で, 同層の沖浜堆積相であることが判明し, 安田砂岩部と再定義した。
19	あきた-お	秋田県男鹿半島における酸素同位体ステージ5aに対比される地層(五里合層;新称)と海生段丘	第四紀, vol.32	第四紀総合研究会		2000	1-10	しろいし	白石建雄	層序	同位体ステージ, 五里合	広域テフラにより同位体ステージ5aに対比される五里合層の定義と海成段丘の存在確認。男鹿半島の平均隆起速度は1.2m/kyr程度である。
20	あきた-の	秋田県能代平野の段丘地形	第四紀研究, vol.16, No.2	日本第四紀学会誌		1977	57-70	ないとう	内藤博夫	地形	段丘地形, 段丘構成物, 地形面対比, 変動地形	能代市周辺の段丘面の標高・段丘堆積物の比較による地形面対比から, 北部で海進期以降の面として燻谷I~III, 東雲I~IIIおよび水沢I~II, 森岳I~III, 成合面を区分した。